

新・いちご栽培ベンチで収穫量をUP

昨年11月のいちご栽培終了から今年度の目標である「収穫量UP」に向けて、2棟あるうちの1棟の栽培槽（以下栽培ベンチ）を1段から2段式に組み替えました。このベンチを使用することで収穫量は前年比の約1.5倍になります。



始動!! 夏いちごプロジェクト vol. 1

まだまだ肌寒い気温が続きますが、春の訪れを感じる今日この頃。今年も猿払産夏いちごの季節がやってきました！協力隊の山口です。しばらく更新が途絶えていた施設園芸の活動日誌でしたが、新年度になり情報発信に力を入れることとなりました。また新年度を機に事業名も『夏いちごプロジェクト』と改名して今後の広報に掲載していきます。この広報を通じて、今いるメンバーがどんな想いでこのプロジェクトに参加し、何をしていきたいのかが伝わることを切に願います。それでは新年度の栽培方針や去年度から変わった点を見ていきましょう！

新・養液システムの導入

いちごは品種によって必要な養液濃度が異なります。以前の養液システムでは全てのいちごに一律の濃度で養液を与えており、品種や生育状態に応じた細かな調整ができないものでした。しかし、今年度から導入された新たな養液システムでは、品種ごとや栽培ベンチごとに濃度や灌水時間の設定を変えて養液を送ることができます。更に、ハウス内環境をモニタリングしてインターネットと接続することで自動管理ができる環境制御システムとも併用することで、各品種のいちごにとって快適な生育環境を実現し、収穫量の最大化を目指します。



今年のいちごの品種は何？

栽培品種も昨年の5品種から3品種に絞りました。まずは収穫量を一番に重視。次に味や形、管理のしやすさ、病害虫に対する耐性の総合力で選定されたのが以下3品種です。

栽培品種も昨年の5品種から3品種に絞りました。まずは収穫量を一番に重視。次に味や形、管理のしやすさ、病害虫に対する耐性の総合力で選定されたのが以下3品種です。

なぜ収穫量UPが必要なの？

実際にいちご農園の経営を行う上で収穫量はとても大切な要素です。安定的な量を確保することで、より幅広い分野のお客様にいちごをお届けできます。このプロジェクトの目指す新しい産業の構築では、あらゆる場面で乗り越えなければならないハードルがあり、その一つが販売ルートの確立でした。どういった販売先に、どのような質のいちごがどれだけ必要とされているのか。これらのことを見込んで販売先を確保する為には、それなりの収穫量がなければなりません。今ある施設を活用して安定的な量を確保するための対策が、2段式ベンチでの栽培でした。



～2023年は飛躍の年に～

一般的な就農者の栽培面積より小さなハウス内での事業なので、村民の方々にたくさんいちごに触れ合える機会を設ける事が難しく、もどかしい思いです。しかし今年度は小規模ながら、村民対象のいちご摘み体験や各種イベントでの販売、いちごミルク等の加工品の販売も計画中！昨年同様Qマートさんの販売ももちろん実施予定です。『さるふつイチゴ』がより良い产品となるよう、栽培・販路・経営戦略を練りプロジェクトの成功に努めて参ります！

文責：山口 智代 山田 大貴 山田 久美子